アイスクライミングゲレンデの現状

馬　目　弘　仁（信州大学学士山岳会）

はじめに

コロナ禍を過ぎ、再び登山やロッククライミングが活況を取り戻した。アイスクライミングでも同様、ゲレンデと呼んで差し支えない人気エリアでは、土日には多くのクライマーで賑わうようになっている。（八ヶ岳の赤岳鉱泉周辺、上州荒船山の相沢奥壁などでは平日でも多くのクライマーが訪れるようになった。）

さて、先行して人気を得ているロッククライミング。そちらの方では、今様々な課題が浮かび上がっている。来訪するクライマーが増えて喜べることばかりではない。自然の岩場では、クライミングジムやスキー場のように管理整備する経営母体があるわけではないからだろう。

さてここでは、人気ゲレンデとなっているアイスクライミングエリアの現状について俯瞰することを目的とした。アンケート等によって実数値を把握することがかなわず、識者からの聞取りと私見をまとめて推測することが主となってしまったが、これから考察に進むための材料、その足がかりとなりそうなところを現状分析して紹介したいと思う。

（聞取りについては、山岳ガイド・山下勝弘氏、今井晋氏、アイスクライミングインストラクター・安達ナオコ氏から協力をいただいた。また、各エリアで出会ったクライマー諸兄からも聞取りさせていただいた。）

１．分析対象

(1) アイスクライミングゲレンデ

代表的な人気アイスクライミングエリアの現状について聞取りをした。

八ヶ岳の各エリアとルート、南佐久・湯川の氷瀑群、相沢奥壁の氷瀑群、御嶽山麓の岐阜側・濁河温泉のアイスエリア、米子不動の氷瀑群、乗鞍岳山麓の各アイスエリア、上高地の氷瀑群、北海道の層雲峡と雷電海岸。

(2) アイスクライマー

上記したアイスゲレンデに登りにくるクライマーについて、どういうクライマーがどういうスタイルでアイスクライミングをしているのだろうか。特に初中級者、初めてアイスクライミングに取り組むという人の傾向について紹介する。

２．現状分析

(1) アイスクライミングゲレンデ

前述した通り、人気ゲレンデでは、土日にもなるととにかくクライマーが多い。（平日でも誰かしら取付いている。）ガイドによる講習会も盛んに行われている。エリアによるが、トップロープがセットされていることが多くて終始混雑していると言っても過言ではない。2024年度のシーズンでは、かつては上級者のエリアと目されていた米子不動も賑わうようになっている。近年暖冬傾向が続き、クライマーは増えてもゲレンデはむしろ減ってきている状態にあるようだ。

和気あいあいと皆で楽しく安全に登れれば何も問題はないが、そうであるとは一概に言えないのが現状だ。以下にその具体例を挙げてみる。

1）クライマー側が要因の課題

・許容人数がロッククライミングエリアに比べて少ない

（アイスクライミングは落下物の危険が大きい。氷の破片が落ちて来るのは常の事であるし、場合によってはアイススクリューやアイスアックスが落ちて来ることもある。そのため、ロッククライミングゲレンデに比べてそもそもエリアの収容人数が少ないと言える。氷瀑の真下に多くの人が集まるだけでリスクは高まるため、トップロープでの練習とリードとの混在、ルートの独占、長時間の待機などで感情的なトラブルとなったケースも聞く。）

（氷瀑や氷柱は先細りの形状が通常である。そのためにトップロープと懸垂下降支点のバッティング等が、ロッククライミングエリアに比べて起きやすい。）

・氷の状態変化による危険度の増加

（アイスアックを打ち込み、アイススクリューで穴を開けるので、登れば登るほど氷にダメージが蓄積される。南面で日が当たり良く、水っぽい軟らかめの氷瀑系では夜の再凍結であっというまに修復されてしまうが、地面からの浸み出しが凍って形成されるような氷柱系では、毎日のようにクライマーが訪れると修復が間に合うことなく長期間にわたってヒビ割れが残ることになる。そういう氷柱をリードするのはかなりリスクが高いし、ビレイヤーも大きな落氷を受ける危険が大きくなる。）

（標高が低いエリア、日当たりが良い南面のエリアでは気温や降雨による氷の状態変化が著しい。ＳＮＳの情報と当日の氷の状態が大きく違うことも珍しくない。）

2）アクセス問題

今まで問題にならなかったことが顕在化してきている。地元の方々に認知され受け入れられているエリアとそうではないエリアでは大きな違いがある。アイスクライミングが冬山登山の一分野的に認められて（観光資源として）上手くいっているところは大きな問題は起きていない。駐車場やトイレが整備されているし、事故については山岳遭難として認知されるからであろう。

そうではない場所（財産区有や個人所有の私有林地などの里山）では、クライマーがごく少ない時代であれば大した問題にならなかったことが、増えてくるにつれて目立ってくることになった。今までは、（ロッククライミングと違って、積雪期がシーズンである。農閑期にあたるので山間部の交通量は少なくなる。また対象とする氷瀑は春には融けてなくなるので、岩場のボルトやチョーク跡のような残置物が目立たない。）問題なることがなかったと考えられる。しかし、クライマーが激増すればそうはいかなくなってくる。以前は個々人に因るものとして表立つことはなかったことが、多発すれば「アイスクライマーが引き起こす問題」として見られるようになるのは自然な流れであろう。

以下に、懸念される事項（実例を含む）を挙げる。

・駐車スペースの問題

（除雪の障害、実業（林業の木材搬出など）の妨げとなって問題となった。）

（一般登山者、ハイカーとの登山口駐車スペースの競合）

・積雪路面、アイスバーンの通行の問題

（雪道走行への未対策、未熟な運転認識でトラブルを起こして、地元の車両通行を妨げることが頻発すると問題となることが推測される。）

・糞尿の問題
（観光地や登山口スペースとその駐車場、霊場として参拝者が訪れる場所では、雪解け後に問題となったケースがあった。）
・遭難事故の発生
（行政が一時的にアイスクライミング禁止とする処置をとったこともあった。）

ロッククライミングゲレンデとまったく同様の問題（「アクセス問題」と言われてクライマー間では広く認識されている事柄）である。ということは、アイスクライミングゲレンデも同様なことが起きているし、またこれから起きるだろうと推測できる。

(2) アイスクライマー

近年女性が増えたと感じる。年齢層も多様になった。（10歳代の若者というのは非常に珍しく、30歳代以上がほとんどである。）以下にそのタイプについて挙げてみた。

① 無積雪期の山登りと沢登りをする。その延長線（登山として）としてアイスクライミングを楽しむ。
② 冬山登山もする。その流れでアイスクライミングをはじめた。
③ 無積雪期にロッククライミングに取組んでいる。冬のクライミングとしてアイスクライミングをはじめた
④ ウインターアクティビティーとして興味が沸き、体験してみることからはじめた

概ね上記のようなきっかけでアイスクライミングをはじめていると推測できる。

今回の聞取りによって（私にとって）意外だったのは、タイプ③はかなり少数派ということだ。ロッククライミングの熱心な信奉者は、年中それに打ち込むようになった。）

タイプ①、②のようなオールラウンドに山登りをする方々がアイスクライミングをすることが多いとのこと。タイプ④も少なからずいるのも驚きだった。SNSの情報を見て面白そうだから、インスタ映えするのでやってみた、ということのようだ。その多くはリピーターにはならないらしいが、講習会的に大勢で（トップロープで）登るのでゲレンデを賑やかにしてくれる存在となっている。

1）クライミング技術の習得度

上記のアイスクライマーは、「ロッククライミングは積極的にはしない。冬は、アイスクライミングが好きでよく行く」という方々が多数派だという指摘があった。

これは、どういうことか。ロッククライミングの基本的な技術、たとえば「ビレイやロープワークの習熟度が低いクライマーもアイスクライミングをする」ということである。ここで問題になるのは、「実地のアイスクライミングでは、過酷な氷点下の環境で行われるゆえに基礎的なクライミング技術を学ぶことが非常に難しい」という事実である。確保技術や支点の構築など多岐にわたるクライミング技術の習得については、無積雪期のロッククライミングでしっかり取組んで技術的ベースをつくってからアイスクライミングに進むのが正道であろう。

2）トップロープとリードのリスクの差

スポートクライミングでは墜落することを前提として技術が成り立っている。一方アイスクライミングでの墜落は致命的な事態につながりかねない。出来るだけ避けなければならない重大事という認識を

アイスクライマー皆が共有しているのか、といった問題がある。

最近のゲレンデでは、リードクライミング中のグランドフォール、トップロープクライミング中のビレイミス、ビレイポイントの構築ミス、懸垂下降時のミス、アイススクリューのすっぽ抜け、テンションをかけたアイスアックスのすっぽ抜けなど多岐にわたる事故が発生しているそうである。特に注意すべきは、「グランドフォール」を頻繁に耳にするようになったとのことだ。リードにもビレイにも両方難有りという事故例もあるようだ。

「テンション！」と叫んで気軽にフォールするリードクライマーを見て背筋が寒くなったという話も聞いた。ニュースになった事例、表に出なかった事例含めて事故件数が増加傾向にあることは確からしい。

3）技術の習得方法

SNSの動画を参考にしているという方々がかなり多いのではないかという指摘もあった。信用できる情報から発信者の勝手な思い込みによるものまで様々なものが出回っているので注意が必要だ。前述した通りだが、ロッククライミングの基礎知識を持たずにアイスクライミングの技術的情報を真に受けて実践するのはリスクが大きいと考えられる。

山岳会系のベテランの方々の指導方法にもいろいろと問題が内在しているようである。ロッククライミングほどには一般技術について書籍等での紹介が少ないからだろうか。一例として、「アイスアックスのスピッツェホールにテンションをかける（レスト、プロテクションセットのために）方法」が挙げられる。これは、どのメーカーも推奨していない（SNSで紹介していたりするが…）。もちろん危険だからだ。墜落するよりははるかにマシではあっても、その行為によって負傷した実例が多いのが現状である。ギアの進歩によって技術も進化するのは当然のことであり、昔の技術が今は間違っているとされることもある。

4）北海道について

今まで本州のエリアについて述べてきた。日本の一大アイスエリア、北海道についてはどうであろうか。現状は以下のようである。

- アイスクライマーが特に増えたようには感じない。順番待ちになることも時々あるが大きな問題とはなっていない。（本州から来るクライマーは増えたと感じる。）
- インバウンドによる問題も起きてはいない。
- 大きなアクセス問題はおこっていない。駐車場のトラブルも聞いていない。
- 事故は特に増えていない。地元の山岳会系の方々が多い傾向がある。初心者だけで登りにくるようなパーティーをほとんど見かけることがない。
- 積雪期間が長いためかもしれないが、糞尿の件は今のところ問題化していない。

当地でトラブルとなっていないのは、クライマー数が大幅に増えていないからだと推測される。北の大地はおおらかだなあと思う。

3．考察にかえて

永続的にアイスクライミングを楽しむには、アイスクライマーはどうすればよいのだろうか。（現状では、すでにオーバーユースと言える状態のアイスクライミングエリアが在ると認識すべきと考える。）老舗と言われる人気ロッククライミングゲレンデの歴

史を参考にするのが一番であろう。エリア毎に特性があって、個別の案件毎に試行錯誤を経て対策が施されてきた。ローカルクライマー達が、岩場の在る地元の方々から理解を得るのにどのような事をしてきたのかなど大いに参考になるだろう。（フリーファン、ロックアンドスノーなどのクライミング専門誌にはそれらの記事を目にすることができる。今後の予測には役立つと思われる。）

以下は、私見ではあるが、今すぐにアイスクライマーが取り組めることとして提案したい。

① 環境美化に努める
携帯トイレを持参して大便を持ち帰ることを強く推奨したい。

② 車両の運転
スタッドレスタイヤを過信しないこと。駐車場所については十分な配慮をする。

③ 重大事故を防ぐ
経験を積むことを大事にして少しずつステップアップすること。

④ エリアの特性が大きく異なることを知る
標高、気温、積雪状況、などエリア毎の自然環境の違いが大きい。凍傷、低体温症、雪崩の危険に対して無防備ではいてはいけないこと。（八ヶ岳方面の沢筋、上高地周辺、米子不動、雷電海岸などは、時として規模の大きな雪崩が発生する。）

おわりに

SNSの影響は速くて大きい。エリアの氷結情報が出ると、その週からクライマーがそこに集中する傾向を強く感じる。誰だって外れを引きたくはないし、よく名が出るルートならコレクションしたくなって行ってみたくなるのもなんとなく分かる。

人のいないところでもっと自由にアイスクライミングがしたいと思う気持ちもよく分かる。そういうところは深い山岳地帯のエリアにあって、クライミングとはまた一味も二味も違う冬山登山のスキルが必要となってくるのだが。ひょっとしてゲレンデとバックカントリースキーの違いと同じなのだろうか。（そのうち識者諸兄に聞いてみたいと思っている。）いずれにせよ、「アイスクライミング」はいろいろと転機を迎えているのではと思う次第である。